藤原政治哲学のアクチュアリティ 著作集刊行で浮き彫りに

SHIN-HYORON NEWS

2005.9.4〈藤原保信著作集〉刊行記念会の模様

［上］内田 満 氏
［下］会場の模様　壇上は姜 尚中氏

▼今年二月より刊行がスタートした〈藤原保信著作集〉全一〇巻は、一〇月末刊行の第四巻『西洋政治理論史（下）』で五回目の配本となる。刊行が軌道に乗ったことを祝し、九月四日、藤原の生誕日に合わせ、刊行記念会が都内リーガロイヤルホテル東京で開催された。佐藤正志・齋藤純一両氏（ともに早大政治経済学部教授）が司会を務め、早大・藤原ゼミの出身者を中心に約一二〇名が参加し、盛会となった。

▼会の中では、藪下史郎（早大教授・政治経済学部長）、三谷太一郎（東大名誉教授）、内田満（早大名誉教授）、佐々木武（東京医科歯科大名誉教授）、千葉眞（国際基督教大教授）、姜尚中（東大教授）各氏ら日本の政治学界を代表する研究者がスピーチを行ない、藤原政治哲学のアクチュアリティや故人の思い出について語った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

▼内田満氏は、「重要事は市場に委ねよ、という論調が高まる中、政治学は〈市場以外〉の余り物を扱う学問に成り下がるのかという危惧を抱いている。『何のための政治学か』を生涯真正面から問い続けた藤原さんの著作がこうした形で世に問われ、その現代性が浮き彫りにされることは、政治学の役割が揺らいでいる現代にこそ、まさに時宜を得た企てと言える」と語った。

▼姜尚中氏は、藤原政治哲学の先駆性について次のように語った。「社会主義の崩壊と冷戦の終結を経て、今アメリカは『力による平和の確保』を謳い、ネオコンの論客達はホッブズをその理論的根拠として引き合いに出している。藤原先生はすでに三〇年も前に、ホッブズを超えなければ近代を超えることにはならないということをはっきりと自覚されていた。没後一一年が経った今日、藤原先生の学的営為が、国際政治の生々しい動向の根本にある問題と繋がっていることを発見し、その先駆性に感嘆を禁じ得ない」

▼著作集前期配本の五冊（第三、四、六、九、一〇巻）では、自然観の変遷を軸とした西洋政治理論の読解、大山郁夫を中心とした民本主義の再検証、自由主義の再検討、公共性の再構築、などのテーマが扱われている。後期配本の五冊の構成は以下の通り。シュミットやロールズ、ハーバーマスなど二〇世紀の思想家を扱う『二〇世紀の政治理論』（第五巻）、規範理論としての政治学を追究した『政治哲学の復権』（第七巻）、自然・環境・世界観を軸に新たな政治理論の構築を提唱した『政治理論のパラダイム転換』（第八巻）、ホッブズにおける近代の確立を論じた『ホッブズの政治哲学』（第一巻）、「人倫」の概念に注目した『ヘーゲルの政治哲学』（第二巻）。来年秋に完結の予定。

＊内容見本呈・小社営業部までご請求下さい